

自営業。

## 一万回

四十才を過ぎた頃、積年の念願がかなって夫婦で神戸ビーフ専門の店を開いた。パート従業員も四人ほど雇用して、些細でも充実した日々を過していた。

隣の店は小型のスーパー“よろずや”さんだ。同世代の御夫婦は仕事好きの働き者で片時も休もうとはしない。隣同士お互い働くことが苦にならない質だったので毎朝、

「今日も頑張ろうね。」

「そうやねえ、はりきろうね。」

と、気安く言いあえる仲間だった。

繁忙な歳末商戦を終え、正月の松飾りも外して新しい一年の日常が始まりかけた頃。一月十七日未明の激震。神戸市中央区は震度七の天変地異に見舞われた。

店は全壊の赤紙。家には半壊の黄紙を調査係が貼りつけた。幸い家族は奇跡的に命拾いをして助かったが“よろずや”さんの家は、二階に寝ていた一人娘さんだけが助かって、御夫婦は崩壊した家の下敷きになって亡くなられてしまった。二人とも布団の中で即死に近い状態だった。逃げる間もなく、起きる間もなく柱や壁が一気に崩れ落ちたからだ。

あれから十五年。ガムシャラに、死にものぐるいで再建を目ざした。漸く形が整って、気がつくと還暦はとっくに過ぎていた。

ふと、（?・・・。どんな人だろう？）って、思うことがある。あの御夫婦はまだ寝ている状態だと思っているかも・・・と。あ

の二人はまだ明日を待っているのではないかと思うことがある。あの日以来私は五千日以上明日を過ぎてきたが、もしかしたら、たった八時間ほどの刻なのかもとも。

必ず私の明日が来る保障はない。それなのに平然と明日を信じている。何の疑いもなく眠りにつく。明日の仕事の手順を考えながら明日を信じている。

先日、百二才の女性に出会った。

「私ね、昔は社交ダンスの教師だったのよ。今でもデイサービスにダンス教えに行ってるのよ。あなたにも教えてあげるね。」

品のいい白髪的女性は私の手を取り、「スロースロー、クイッククイック。」と足の運び方を教えてくれた。彼女の孫達は、うんざりした表情で「一万回は聞いてきたよなあ。」と半ば呆れている。孫といっても五十才を過ぎた中年だ。あげくに「うちのバアチャン死ぬのん忘れてるんや。」と言いだす始末だ。

各々の人生が、各々の生き方が、各々の道が、各々が自身だけの道を歩かねばならない。

明日が与えられる限りは、明日を歓迎しよう。年令で都合良く限界を作るまいと決めた。明日は明日。明日の風になびいてみよう。明日の雲にも乗ってみよう。まだ四十年もあると思うと無限大の道が広がっている。

心底にくすぶっていた生き残った者の罪悪感から解き放たれた瞬間でもあった。

いつか私も“大震災に勝ってやったよ”って言うてみようと思う。そしてお隣さんに会えたなら“あなたの分も生きといたよ”って言うてあげたい。あなたも一緒だったんだよって言うてあげたい。

一万回の朝を迎えても百二才にはかなわない。確かな一朝と、

確かな一夕を重ねることにした。

さあ、これからだ。本番はこれからだ。